

# 19世紀のクラヴァットにみるダンディズム

神部 晴子\*

## Dandyism through Cravat in the 19th Century

Haruko Kanbe

要 旨 19世紀初期、ダンディ達の身だしなみの中でも、首元にあしらわれたクラヴァットはとりわけ彼らの関心を引く部分であった。そのことは、当時クラヴァットに関する数々の小冊子が刊行されたことによっても明らかであり、例えば、1818年に出版された『ネッククロスィターニア』(Neckclothitania or Tietania)や1828年に出版された『ネクタイの結び方の技術』(The Art of Tying the Cravate)などを挙げる事が出来る。それらには、クラヴァットを単なる装飾品としてではなく、男性の家柄や教養を示す一つの紹介状である、とも定義づけられている。ところが、同中期に入るとクラヴァットは簡略化に向かったことが多くの服飾史文献から読み取れる。

なぜ、19世紀初期のクラヴァットは男性にとって重要であったのか。そして、いつ頃からその衰退傾向が始まり、またその理由は何だったのか。私は、19世紀初期のクラヴァットとその美意識、及び中期のクラヴァットの変化を辿りながら、クラヴァットとダンディズムについて考察した。その結果、クラヴァットは、イギリスにおけるダンディズムの盛衰と一体であるという見解に達した。

### はじめに

19世紀初期の男性ファッションの中心となったのは、いうまでもなくジョージ・B・ブランメル (George Bryan Brummell, 1778~1840) に代表されるダンディ達であった。彼らは、それまでの洒落者とは異なり、服装に対して一種の精神性を見出し、わけても、その関心の的となったのはクラヴァットであった。E・カラシュスもこう述べている。「ダンディとは、この名高いネクタイのことではなかろうか。」<sup>1)</sup>と。

ところが、同中期に入ると、クラヴァットはその役割を縮小し、簡略化に向かう。なぜ、19世紀のクラヴァットは男性にとって重要であったのか。そして、その衰退はいつ頃から始まったのか、またその理由は何だったのか。

本稿では、19世紀初期のクラヴァットとその

美意識、及び19世紀中期のクラヴァットの変化を辿りながら、前世紀のクラヴァットとダンディズムについて考察をした。

### 第1章 19世紀初期におけるクラヴァットへの関心

19世紀初期のネクタイが、男子服の中でもとりわけ関心を引く部分であったことは、当時クラヴァットに関する出版物が幾種類も刊行されていたことから明らかであり、しかも、中には何版も重ねたものが少なくない。例えば、1818年に出版された著者未詳の『ネッククロスィターニア』(Neckclothitania or Tietania)<sup>2)</sup>や1828年に出版されたル・ブラン著の『ネクタイの結び方の技術』(The Art of Tying the Cravate)<sup>3)</sup>は、その代表的なもので、そこには、数多くのクラヴァットの結び方が紹介されている。まず、前者について見ただけでも次の12種が挙げられる。(後者のそれと重複するものも多いが、そのまま掲げておく。)

\* 本学助手 西洋服装史

東洋風タイ (Oriental Tie) : 極めて堅い布で作られる。そのため、頭や首を突然よじったり曲げようとする時には、少なからず危険が有り得る。この結び方では、目に見える皺や窪みがあってはならず、かつ流暢で滑らかさを表示する必要がある。このネッククロスは、堅さの加減こそが全てであり、その堅さに信頼をかけることが出来なければこれを試みるべきではない。更に、純白以外の色付きを使うことは絶対にいけない。

数学的タイ (Mathematical Tie) : 三つの折り目を作らなければならなかったものに比べ、はるかに簡単である。耳の下からネッククロスの結び目に届くまで降ろしながら、左右に逆三角形の折り目を作り、その上に水平の窪みを作れば良い。高さは、かなり高いか、あるいは鼻の近くまでであるが、着用者の満足により異なり、顎に近いものや、そうでないものは異なった効果を示す。この結び方は、一見して出来具合がわかるほどの失敗は引き起こすことがない。一番好ましい色は、薄いピンク色。

オズバルデストーン<sup>4)</sup>・タイ (Osbaldeston Tie) : この結び方は、他のものと比べ大いに違ったものを示す。最初に首の後ろに据えてから両端を前にもってきて、大きな結び目を作る。結び目は少なくとも約10センチ、厚さは約5センチ必要である。この結び方は、しばしば夏に用いられる。なぜなら、ほとんどのネッククロスは首の周りを二重に巻くが、これは一重である。最も適した色は、濃い空色である。

ナポレオン・タイ (Napoleon Tie) : どういうわけかこの結び方は、ナポレオンと呼ばれ、私はフランス皇帝が結び方を考えたというの聞いたことがない。これは、ナポレオンがエルバ島から戻ってきた時に着けたと言われる。首の後ろに揃えてから両端を前に持ってきて、結び目を作らず、しっかりと交差させ、ズボン吊りにしっかりと留めるか、腕の下を通して後ろでしっかりと結ぶ。こ

れは、非常に美しい外観を持ち、着用者に感傷的で色っぽい姿を与える。紫色や恋する人の唇色が最も適している。

アメリカ風タイ (American Tie) : 並んだ刻み目を除いては、マセマティカル・タイに似ており、耳の近くまではいかない。横、真ん中に折り目はない。色は海のような緑が適している。

郵便馬車タイ (Mail Coach Tie) : ウォーターフォール (滝) と呼ばれる。一つの結び目で作られる。一方の端を反対にもってゆき、結び目を完全に覆い、外に向かって広げてウエストコートに垂らす。このタイを作るためには、大きな布地が必要である。今では、駅馬車の御者、衛兵、風変わりな洒落者などが着けている。糊は、ほんの少しつけるかもしくはつけなくても良い。柔らかい布が適している。

愛の王座タイ (Trone D'Amour Tie) : オリエンタル・タイに似て最も威厳のある結び方である。両端に堅く糊づけして、真ん中に水平の窪みを一つ作る。青磁色が良い。

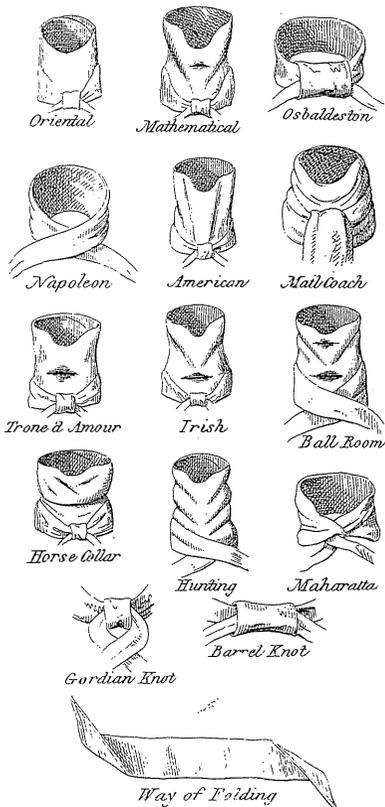
アイルランド風タイ (Irish Tie) : マセマティカル・タイに似ているが、明らかに違う点は、結び目が折り目の接点の下に配置される。色は強烈な青が良い。

舞踏会用タイ (Ball Room Tie) : うまく結べた時は実に気分が良い。マセマティカル・タイとアイリッシュ・タイの特徴を兼ね備え、二つの並んだ窪みと二つの折り目を持ち、一つは前者のように上に作り、もう一つは後者のように下に作る。結び目を作らず、ナポレオン・タイのようにしっかりと留める。純白のみが良い。

馬の首枷型タイ (Horse collar Tie) : 今や、理由もなく大評判であるが、多くの着用者達には、この結び方よりほかに能がないからだと思われる。これは、最も悪趣味で下品である。大きな半月形か馬の首枷に見える。これらにページをさく必要はない。私はむしろ、完全にやめることを心から望んでいる。

狩猟用タイ (Hunting Tie)：もしくは、ダイアナ・タイ (Diana Tie) と呼ばれ、両脇に平行して出来る二つの折り目が中央部で交わり、窪みが出来ぬよう注意を払う。通常、ボール・ルームやナポレオン・タイのように両端を交差させる。最適の色は、淡黄色。  
マハラッタ・タイ (Maharatta Tie)：もしくは、ナポップ・タイ (Nabob Tie) と呼ばれ、繊細なモスリンで作られているので、とても涼しい。まず、首の後ろに据えてから、両端を前に持ってくる。そして、鎖のように合わせながら、残りの部分を後ろに戻し、後ろでしっかり縛る。好ましい色は、濃い赤、青、緑といったベルジャ絨毯の色。  
 (筆者注・ちなみにナポップとは大富豪・大権力者の意)。

以上が、『ネッククロスィターニア』にみられ



Pub<sup>d</sup> by J.J. Stoddola 41 Pall Mall 1<sup>st</sup> Sept 1846.

図1 『クラヴァットの結び方』

る結び方の全てである。この小冊子には全37ページに渡って糊付けや保存方法、そして著者のファッション観を含め、これら12種類のクラヴァットの結び方が詳述されている。(図1参照)

次に、1827年にパリで、翌1828年にロンドン版が刊行され、その後11版以上も版をかさねた全72ページからなる小冊子ル・ブラン著の『ネクタイの結び方の技術』についてみる。

クラヴァットの発生から今日までの歴史を前置きとし、16レッスンに渡って32種類の結び方を明快に図解し、(図2・3参照)クラヴァットの色や手入れ法などにも触れている。巻末には、「社会におけるクラヴァットの重要性」と題した著者の見解が述べられている。

また、この小冊子は、ル・ブラン男爵 (H. Le Blanc) の著作とされているが、文献目録等によると、フランス語版では、エミール・ド・ランブゼ男爵 (du baron Emile de l'Empesé) の偽名で、本名をマルコ・サン・サンティレール (Saint-Hilaire, Emile Marc Hilaile, known as Marco de) ないしは、作家バルザック (H. Le Balzac) の作であるという説もあり、バルザックが印刷業に関わっていた時期と重なることから、少なからず関わりをもっていたと考えられている<sup>5)</sup>。その結び方の種類を紹介しよう。

東洋風クラヴァット (Cravate à l'Orientale)：ターバン型で、端は三日月型を作る。この場合、私達は顎の下につけるが、イスラム教の人達は額の上につける。この形は、小さくしなければならず、先端に糊付けを必要とする。わずかな皺も許されないので、三日月型を保てるように、鯨髭が使われる。この方式からの逸脱は、東洋風とう名称を完全に奪ってしまうであろう。

アメリカ風クラヴァット (Cravate à l'Américaine)：糊付けされていれば、極めて簡単に形作られる。正確に作られた時、コリントスの柱頭を支えるような円柱の外観が得られる。この形は、ここでもまた、西半球の上流社会や私達の友人にも多くの崇拝者を持

っている。鯨髭で堅くすることが必要である。海緑色や、青、赤、白の縞が良い。

馬の首枷型クラヴァット (Cravate Collier de Cheval)：東洋風クラヴァットに似ている。女性は夫や恋人にそれを勤める。このように、これは出来る限り様々な方法で奨励された。端は、首の後ろで堅く結ぶか、あるいは折り目に隠してしまう。糊付けは不要。横縞や大きな斑点が好まれる。適色は、ロシア革と呼ばれるもの。時折、黒が使われる。

センチメンタル・クラヴァット (Cravate Sentimentale)：この名前だけで、全ての人に似合うわけではないことがわかる。自然は、あなたにバラと百合の競争する様子や火のような目、絹の肌、真珠の歯、珊瑚の唇を与えなかった。事実、顔が好ましい魅力を持たなくても、一瞬にして意識上に混乱を広げ、あなたを見る人全ての人の心を悩ませる。強い糊付けが必要で、上に花結びをして堅く結び、顎にできるだけ近付ける。都会よりも田舎で流行していて、亜麻布が好まれる。

バイロン風クラヴァット (Cravate à la Byron)：バイロン卿は、一般の人とはかなり異なっていたので、詩人であるこの君主により付けられたクラヴァットを見ることはほとんど期待できず、その高価さと上品さは、一般にイギリス人の地位を特徴づける。体への最小の圧迫が、精神においても同じような影響を及ぼすので、だから大きくてきついクラヴァットが創造と思考の息を止めてしまう。バイロン卿が、この影響を心配したことから、クラヴァットの不便さを意見として述べており、肖像画の中では彼の首はいつもネッククロス（ネクタイ）の拘束がない。この貴族の名前を持つクラヴァットは、他のものとはかなり違っており、これは最初に据える時の方法である。首の後ろから端は顎の上に持ってきて、大きな蝶結びか花結びでしっかり結ぶ。夏は快適で、長旅では首の周囲を一巻きするだけで良い。黒か白のどちらかである。

滝状のクラヴァット (Cravate en Cascade)：一つの結び目によって形になる。どちらか一方の端を長くし、長い方を内側に持ってきて結び目全体を隠すように下方に降ろす。できるだけ幅広になるように広げ、シャツの胸元にしっかりと結ぶ。そうすると、王宮の溜め池にある噴水の外観が得られるであろう。糊付け不要。

ベルガミ風クラヴァット (Cravate à la Bergami)：バイロン結びに似たベルガミ結びは、最初首の後ろに据えられていた。そして、端を前に引き寄せ、結ばずに胸の上で交差させてズボン吊りにしっかりと結び、腕の下を通して後ろで結ぶ。

舞踏用クラヴァット (Cravate de Bal)：これは結ばないで、ベルガミ結びのようにズボン吊りかシャツにピンでしっかり据える。腕の下に両端を通し、後ろで結ぶが、踊る時、体と共に動くから、この方法は不便なので、最初の二つを勤める。単純簡潔に結ばれるべきで、大きくなくてはならない。これが入念に結ばれた時は、見られるほど上品である。数学風クラヴァットの上品さと、ベルガミ風クラヴァットの無頓着さも兼ね備えている。色に対する完全な禁止を提起しなくてはならない。白だけを用うべきである。わずかな糊付けが必要。

数学的クラヴァット (Cravate Mathématique)：調和と均斉は、全ての芸術の基本である。美しい風景の中に、時折私達は雄大な樅の、もつれて曲がった幹を楽しむ。しかし、正確で美しいギリシャ風の円柱の調和も、私達に驚きと称賛を与えてくれる。この数学的クラヴァットは、調和と秩序の取り合せである。厳格で威厳があり、わずかな皺も許されない。端は、幾何学的に作られるべきで、コンパスによってできえも吟味されなければならない。両側から斜めに降ろし、交差した時に二つの鋭角を形づくる。全て水平に折り畳み、二つの鋭角と反対に鈍角も形づくる。通常は黒が用いられる。鯨髭は必需品。

アイルランド風クラヴァット (Cravate à l'Irlandaise) : この結び方は数学的クラヴァットに似ている。端の整え方が多少違い、この結び方では、前で接合させて二周させる。各々の端を後ろにもっていき、首の後ろでしっかりと結ぶ。色は限定されず、糊付けも必要としない。鯨髭は必需品。

マラット風クラヴァット (Cravate à la Maratte) : このスタイルは、最も繊細で、白いインド産のモスリンで作られる。バイロン結びのように、首の後ろから始まり、鎖のようにつなげる。端は、舞踏会風クラヴァットのようにシャツにしっかりと結ぶ。糊付けは不要。単純で簡潔に折り畳む。

美食家風クラヴァット (Cravate à la Gastronomer) : 糊付けせずに堅く結ぶ。美食家の特徴である喉のわずかなふくれに、しばしば呼吸が妨げられる。消化不良や卒中、失神を起こすような場合は、これを結ばないようにする。主に、40歳以上の人が着用。

狩猟用のクラヴァット (Cravate de Chasse) : この結び方は幾人かのエレガントな人達の間では、ダイアナ風と呼ばれる。アメリカ風クラヴァットに見られるように、首に二重に巻く。糊付けは不要。簡潔に折り畳む。濃い緑か人気のある枯葉色が良い。

ダイアナ風クラヴァット (Cravate à la Diane) : 狩猟用クラヴァットに似ているが、白でなくてはならない。

イギリス風クラヴァット (Cravate à l'Anglaise) : ゴルディアン結び (Noeud Gordien)<sup>6)</sup>のように作る。糊付けは不要。

独立戦争風クラヴァット (Cravate à l'Indépendance) : 色付き以外では、アメリカ風クラヴァットと同じである。赤又は青と白のストライプで、他の色は使わない。

旅行カバン状のクラヴァット (Cravate en Valise) : 端を除けば、ゴルディアン結びのように作られる。下へ降ろす代わりに、結び目の内側に折り返す。小さくしなければならず、それによって端を隠すことは不可能であ

る。それが、旅行カバンのように見える。好ましい色は、ロシア革のような色。

貝殻状のクラヴァット (Cravate en Coquille) : 貝殻に非常によく似ている。快適で、しかも簡単に作ることが出来る。二重または三重の結び目から成り、端は、首の後ろでしっかりと結ぶ。糊付け不要。

旅行用のクラヴァット (Cravate de Voyage) : バイロン風と同じ方法で着ける。

黒たら風クラヴァット (Cravate à la Colin) : バイロン風クラヴァット、ベルガミ風クラヴァット、タルマ風クラヴァットのような構成で、小さな蝶結びが作られる。端は、ゆったりと残し、シャツカラーを折り返す。

噴水状のクラヴァット (Cravate en Jet d'Eau) : 滝状のクラヴァットと同じ。

女たらしクラヴァット (Cravate Casse Coeur) : ベルガミ風クラヴァットと同じ。

好ましい色は、赤。

怠惰風クラヴァット (Cravate à la Paresseuse) : この結び方は、最も便利で簡単な方法の一つである。今まで軽視されてきたが、それは着用者のシャツを隠すのに好都合であり、クラヴァットを見せびらかすにも都合が良い。

ロマンティック・クラヴァット (Cravate Romantique) : バイロン風に同じで、主として、田舎で着用される。好ましい色は、無地。

正確なクラヴァット (Cravate à la Fidelite) : 数学風結びに同じである。軍装の時、フランスの元国民軍の兵士がこれを付けた。それ以来、フランスの元聖職者が気に入っている。色は黒でなくてはならず、鯨髭を使って折畳み、衿を除いてシャツ姿を保護するよう入念に取り付ける。眩しいほどの白でなくてはならない。

タルマ<sup>7)</sup>風クラヴァット (Cravate à la Talma) : このスタイルは、朝のみ使われる。バイロン風クラヴァットとベルガミ風クラヴァットと同じ方法で整えられる。

イタリア風クラヴァット (Cravate à l'Italienne) : アイルランド風クラヴァットとほとんど同じように形づくられるが、各々の両端を折り返す代わりに輪に通し、かつ両側に戻して小さな結び目で首の後ろにしっかりと結ぶ。鯨髭が必要で、糊付けは不要。白のみが認められる。

外交のクラヴァット (Cravate Diplomatique) : 美食家風クラヴァットに同じ。

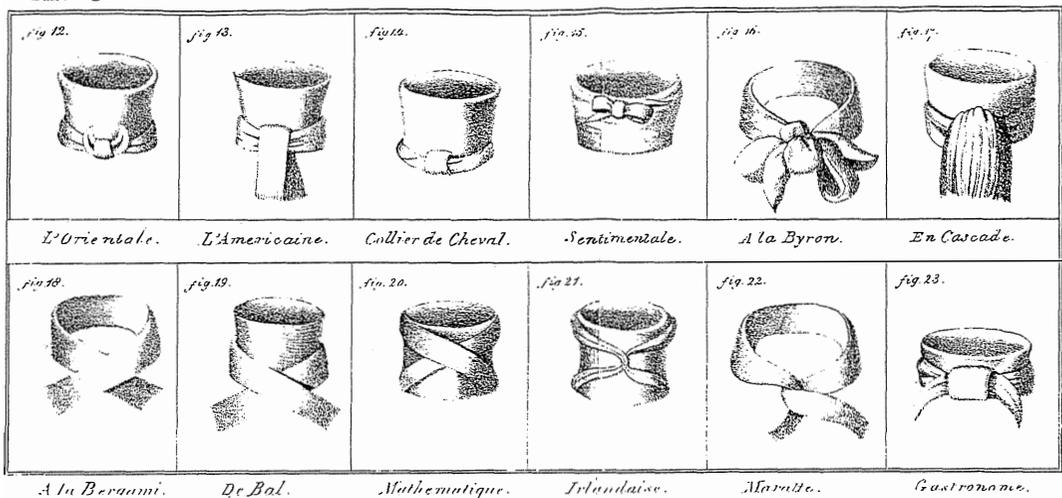
ロシア風クラヴァット (Cravate à la Russe) : このスタイルは、前の部分に両端をもってこないで首の後ろでしっかりと結ばれる全てのクラヴァットが含まれる。それをクラヴァットの下に隠すのではないが、背中に降ろして、ウエストコートの上上がってくるのを防ぐのに注意深くしなければならない。色は幾種類か認められる。糊付けはどちらでも良い。

修道士のクラヴァット (Cravate Jesuiteque) : これは体裁だけのクラヴァットである。このスタイルでは、ウエストコートが鎧のように出来ていなければならない、衿は首を完全に隠すために十分な高さでなくてはなら

ない。シャツの衿は折り返し、バンドの一種を形づくる。近頃、この形は一般的になってきたが、それに決して好意を抱いてはならない。なぜなら、表面上はおもしろ味がないだけでなく、またイエズス会の名声や地位に少しでも似ているものは何でも、心から軽蔑することにむしろ誇りを持つ。

このように、それぞれのクラヴァットに名称が付され、結び方その他クラヴァットに関することが、詳細に述べられている。中でも興味深いのは、男性にとってのクラヴァットの重要性について述べている点で、これによると、クラヴァットは単なる装飾品としてではなく、男性の家柄や教養を示す一つの紹介状であると定義づけられている<sup>8)</sup>。このことから、クラヴァットは当時の男性の服装における重要な要素として、大きな機能を果たしていたことがわかる。そして、著者ル・ブランが、「クラヴァットは、今や理想の頂点に達した。」<sup>9)</sup>と主張するように、彼らは異常なまでの精神性の高まりをこのクラヴァットに見出だしていたことがわかる。

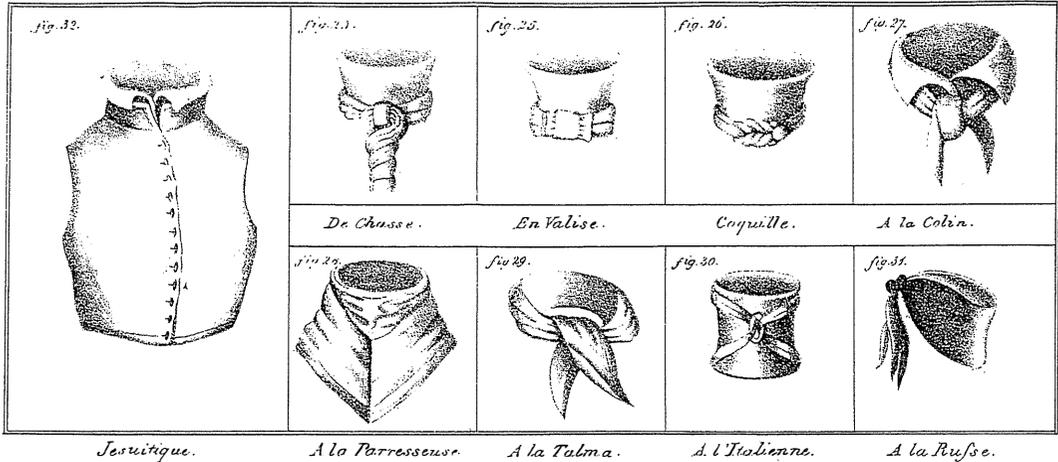
Plate C.



In Gray's N. No. 4 engraving, 350 Strass.

図2 『クラヴァットの結び方』

Plate D.



Legrey & Mauley, Lithog 510. Strand

図3 『クラヴァットの結び方』

## 第2章 クラヴァットの「締め付け」と「結び方」

男性達の間で熱狂的な関心の的となったクラヴァットは、具体的にはどのようなものであったのか。当時の文献をもとに考察してみると次の諸点が明らかになった。第一は、「締め付け」(fasten)である。彼らは、息も出来ないほどクラヴァットを首に強く巻き付けていたと考えられる。そして、振り向く時には身体全体の回転を必要とした<sup>10)</sup>と言う。更に、小冊子には次のような記述が見られる。

「卒中や気絶、そして一般の病気全ての場合には、直ちにクラヴァットを緩めるか、または取り去ることが必要である。(中略)生れつき心臓の悪い人や脈の病気の場合には、完全に禁止する。<sup>11)</sup>

これほどまでに強く締め付けていた理由は、一体どこにあったのか。

この締め付けで思い起されるのは、西洋の女性達が愛用したコルセットである。私は、締め付けるということにおいては、両者に少なからず共通部分があるとみるからである。

19世紀に女性達が胴部を締め付けていたのは、F・ペローによると、実際的な労働をしていると思わせるものを排除し、女性を全ての活動とあらゆる権力から遠ざけてエロティスムと魅惑の対象にするのが目的であったという<sup>12)</sup>。ヴェブレンも、着用者が動くたびに邪魔になることから、労働を不可能にする目的で行なわれた一つの毀損である<sup>13)</sup>と述べている。事実、コルセットを使わなくなるのは20世紀に入ってからであり、しかもそれは女性が労働力として必要とされる第一次世界大戦中のことである。このことから、男性がクラヴァットを締め付ける効果として考えられることは、彼らが非労働者であることを見せつけるためであったとも言えるだろう。

次に考えられるのは、身体の動きを抑制することによる儀式的効果である。このことは、B・ルドフスキーも触れているが、身体の締め付けが儀式と共に自我意識を緊張させる<sup>14)</sup>。また彼は、その中で威厳について述べている。つまり、頭を動かさないことが周囲に崇高な雰囲気を与え、一種の威厳を生むのである<sup>15)</sup>と。

この他、首という危険な部分を苦しいほど締め付けることにより、レイバーのいうマゾヒズ

ム<sup>16)</sup>があったことも考えられる。つまり、コルセットには二つの享楽があり、一つは男性におけるサディズム、もう一つはそれを堪え忍んだ女性のマゾヒズムがあるという。従って、首を締め付けるという行為にも、一種のマゾヒズムがあるのではないかと思われる。

以上のように、クラヴァットの締め付けの要因や効果としては、労働否定、儀式的効果、威厳、性的倒錯の四つ要因を挙げることが出来よう。

次に、「結び方」(tying)である。小冊子にみるクラヴァットの結び方の記述でもわかるように、どの結び方も手軽に仕上がるとは思えないほど複雑である。例えば、大きさは勿論、折り目の数に至るまで厳密に決められており、着用者の性格、政治的意見、職業まで記されている。ル・ブランが小冊子の中で、

「集団で人目を引く時、周囲の目はクラヴァットの結び方に引き付けられる」<sup>17)</sup>

と述べているように、男性にとって重要だったのは、クラヴァットそのものよりも、その結び方にあったと思われる。当時、商売上手な商人は、クラヴァットの結び方を教える学校を開い

たとまで言われるほど<sup>18)</sup>、彼らにとっては大切な要素であった。

ではなぜ、結び方が重要であったのか。ダンディ達は身づくろいのために相当の時間を費やしていた。中には午前中のほとんどをそのために費やし、しかもその大半はクラヴァットを結ぶためのものだったともいわれる。鏡の前で、ひたすら熱心にクラヴァットを結んでいる一人の男性の足元には、失敗した皺だらけのクラヴァットが山のように積まれていたという話は有名である。そして、この厄介な代物を作り上げるための時間を持つことが出来るのは、当時のエリート達であったのだ。その昔、閑暇を持つことが出来るのは貴族であり、何よりもその時間的余裕こそが、上流階級の証明であったともいえる。E・カラシュスも、次のように述べている。

「階級差のなくなったこの時代において、エリートの一員であろうとするならば、高価な衣装を見せびらかすだけでなく、クラヴァットを何度も結び直したりする暇を持つことの重要性が重みを増す。」<sup>19)</sup>

また、北山晴一も、時間的余裕こそが当時の

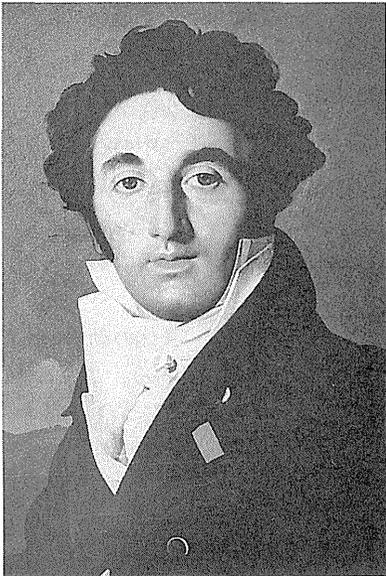


図4 『1820年代のクラヴァット』アングル、コルディエ氏の肖像、1811年、ルーブル美術館蔵

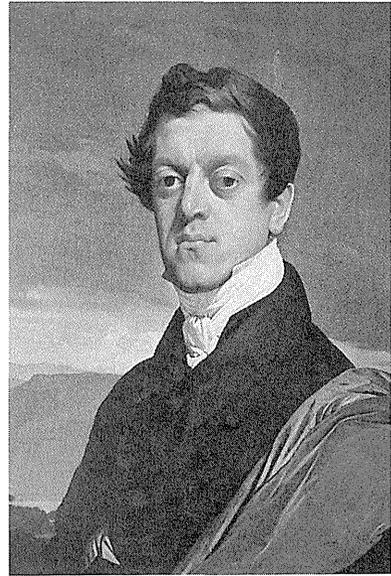


図5 『1820年代のクラヴァット』アングル、ゲーリエフ氏の肖像、1821年、エルミタージュ美術館蔵

お洒落の秘訣であった<sup>20)</sup>とも言っているように、クラヴァットが完璧に結ばれているということは、有閑者であることを意味すると推論出来よう。また当時、バイロン卿が考案したと言われるバイロン結び（第1章参照）というのがある。クラヴァットに貴族の名前をつけるところにも有閑階級への憧れが隠されていると考えられる。このように、複雑な結び方については、着用者の持つ時間的余裕が重要な要素であった。

以上、「締め付け」と「結び方」の二つの特徴に焦点を当てて考察した。社会的に平等化を迎えた19世紀に、クラヴァットは強く締め付けることで自らを労働者ではないと見せかけ、更に貴族のように長い時間を費やして結び上げることで自分自身を高貴な存在として主張していたともいえる。

### 第3章 クラヴァットにみるダンディズム

19世紀の社会的平等化は、服装においても大きく影響した。それまでのフランス宮廷に代表されるきらびやかな服装から、簡素で上品な服装へと大きく変化したのである。言い換えれば、金銭的な地位を、観察者に対して一目で示すことが困難になったのである。しかし、だからといって彼らは、それを素直に受け入れたわけではない。特に、クラヴァットにおいては、彼らの理念を表すものの一つとして、並み並み成らぬ効果を発揮させた。前述したように、それは、クラヴァットを強く締め付けることで、彼らが非労働的であることを表現し、尚且つそれが周囲に泰然とした外観を放ち、緊張感を高める。そして、その締め付けからくる苦痛の底には、一種のマゾヒズムもあったという。しかも、その美しいクラヴァットを仕上げるために要した時間、つまりその手間暇こそが、彼らの存在価値を一層大きくすることとなる。平等化した社会の中で、優雅な生活が保証されたエリートであることを示すためには、ただ美しいものを身につけているだけでは効果が得られず、

それまでに行なった面倒な手順の一切が、それを見る人達に対してより美しいものとして映し出すことになる。クラヴァットは、その労苦の結晶であった。ダンディたちは、自分自身の精神の一側面を表現するために、そしてそこに隠された特別の記号を読み取るために懸命であったものと想像される。クラヴァットには、まだ精神的な部分で貴族になり得る手段が残されていたのであろう。

ところで、ダンディズムが、19世紀の文学や芸術に大きな影響を与えたということは、言うまでもない。ボードレールは、「ダンディズムは、特に民主制がまだ全能になるに至らず、貴族制の動揺と失墜もまだ部分的でしかないような過渡期に現われる。こうした時代の混乱の中にあって、自分の階級からはみ出し、嫌気がさし、することもない人々、それでいていずれも生来の力を豊かにもった人々が一種の新しい貴族制を打ち建てようとする計画を抱くことがあり得る。」<sup>21)</sup>とダンディズムを評している。他方、E・カラシュスは、「ダンディから衣服を奪うのは、とりも直さずダンディを去勢することである。」<sup>22)</sup>と主張している。つまり、エリートの再建がダンディズムであるとするならば、ダンディ達は、服装によってそれを表現している、と考えられまいか。その一つがクラヴァットであり、彼らは上流階級へ立身する手段の一つとしてそれを創り上げた。更に、生田耕作によると、J・ブーランジェも次のように述べているという。「ブランメルは、その服装である。即ち、彼の上衣は一つの語り草、その靴は一つの警句であり、それをそのネッククロスの高見から投げ付けるのでなければ、彼の嘲罵は、どのような効果があっただろうか。」<sup>23)</sup>と。このように、クラヴァットによって自らを締め付け、時間をかけて結び上げることこそダンディズムのひとつの現われであり、その行為の全てが彼らの精神を向上させたと考えられる。

#### 第4章 19世紀中期のクラヴァットの簡略化とその要因

ダンディズムの象徴的な衣服部分として大きな役割を果たしたクラヴァットが、世紀半ばに近づくとも一変して後退期へと向かう。D・コールは、「1865年までにクラヴァットは葬られた。」<sup>24)</sup>と断言している。そして、F・ペローも、「19世紀後半になるとこの布きれに与えられた途方もない役割は縮小し、同時にその形も小さくなっていく。」<sup>25)</sup>と述べている。この他、ブーシェ<sup>26)</sup>、カニントン<sup>27)</sup>も、その後退について触れている。

なぜ、そして、いつ頃からクラヴァットの衰退傾向は始まったのであろうか。またその理由は何だったのか。まず、ブーシェやカニントンの著作をもとに当時の男性達のクラヴァットに対する関心とその変化を追ってみた。

1830年代を通して、それぞれの名称を持ったクラヴァットが引き続いて用いられた<sup>28)</sup>、とカニントンは述べる。そして、K・M・レスター & B・V・オークによると、それまで一つの威信とされた真っ白いクラヴァットは、黒いサテンのクラヴァットに取って代われ、以来夜や公式の場合に用いられるようになり、1837年頃から黒い簡単なネッククロスが好まれるようになったという<sup>29)</sup>。ファッション・プレート等の図像資料によると、1820年代末期から色付きのものが少しずつ見られるようになり、1830年代に入ると多くの男性が黒いクラヴァットを首に巻き付けている。

1830年代末期から1840年代初期にかけては、外見上にやや変化が見られる。衿元にスカーフ状のものが現われ、明らかに首の周りの重みが以前に比べ軽くなる。ジョワンヴィル (Joinville)<sup>30)</sup>やバイロン・タイ (Byron tie)<sup>31)</sup>といったいずれもゆったりとしたスカーフ状のクラヴァットは、1840年代の大きな特徴とみられる。(図6参照)

1850年代になると、低い衿の上に細いネク



図6 『1840年代のクラヴァット』、ファッション・プレート、1846年

タイをしている姿が多くなる。それは、堅く裏打ちしたボウ・タイで、通常は後ろで留め金などでしっかりと留め、平らな結び目が中心に縫い付けられている。これが、最初の既製のネクタイ (結び目を持ったネクタイ) と考えられており、以降、制作は徐々に一般化していく。1850年代のネクタイにおける大きな特徴でもある。また、クラヴァットに代わって“ネクタイ” (necktie) という言葉が用いられるようになるのもこの頃からである。また、特に留意したいのは、それまでのものと比べて明らかに小振りであるということである。S・レヴィットも、1853年にジョン・エドワード・フォードによって製造された細身のボウ・タイが、ネクタイにおいて新たな発展段階を示す<sup>32)</sup>と述べているように、以前のものに比べて非常に低い、つまり幅の狭いものであった。また、それらのネクタイの効果として言えることは、堅い裏地を伴い、後ろをバックルでしっかりと留めていたため、何よりも頑丈であった。そして、これら出来合いの結び目を持つネクタイは、1860年代、1870年代においても多く用いられている (図7参照)。1860年代に入ると、首元の装飾はさらに縮小へと向かう。しかも、ブランメル時代の窮屈なクラヴァットとはかなりの相違がある。そして、衿は、徐々に低くなり、この頃からターンダウン・カラーが普及する。このターンダウン・カラーの登場は、男子服の首元に多大な影響を及ぼしたと既に幾人かが指摘している。D・マルリーは、「ターンダウン・カラーが、

クラヴァットに大きな衝撃を与えた、つまりクラヴァットを退けた。」<sup>33)</sup>と主張している。C・M・レスター & B・V・オークによると1820年まではハイカラーが好まれており、1837年頃から衿先の折り返るものがあった<sup>34)</sup>。しかし、図像資料によると、1840～1850年代でもそう多くは認められない。そして、1860年代になって多く着用され始め<sup>35)</sup>、正式な装いとして認められるのは、1865年のことである<sup>36)</sup>(図8参照)。

いずれにせよ、この世紀の前半を通して紳士の首元を顕著に表していた高い衿は沈み、同時にクラヴァットも以前に比べ小振りになっていることには相違はない。

以上が、19世紀中期におけるクラヴァットの外観の変化であり、明らかな簡略化がみられる。また、服飾史文献等においてもクラヴァットに関する記事は減少してくる。一体、これにはどのような背景があったのだろうか。

『ネクタイ誌』の中で、出石尚三は、「花の盛りの如く咲き乱れたクラヴァットは、この頃現われたラウンジ・ジャケットに歩調を合わせるように簡素な結び方を目指すこととなる。」<sup>37)</sup>と述べている。ラウンジ・スーツの原型であるラウンジ・ジャケットが現われたのは、1848年と考えられており、堅苦しい燕尾服から身体を解放する目的で考案された。一方、フランスでは1849年頃から実用的な上衣としてヴェストンが一般市民の間で流行し始めている。それまで上流階層に好んで用いられていたフランス風ア

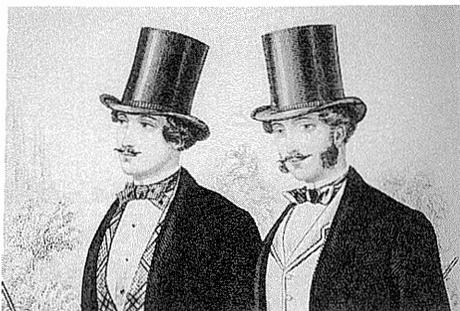


図7 『1850年代のクラヴァット』、ファッション・プレート、1856年

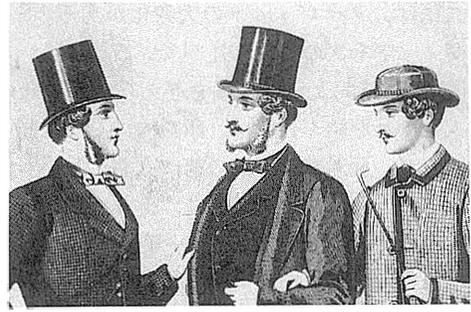


図8 『1860年頃のクラヴァット』、ファッション・プレート、1859年

ビは、1848年の二月革命以来ごく一部の正装用衣装として姿を残し<sup>38)</sup>、ヴェストンは、当時の生活に即した実用的衣服として民衆の間に普及していく。このような衣服が流行した背景には、やはり民衆の力が大きく影響していると考えられる。つまり、革命以来、彼らの精神の根底には、美しさよりも実用性が重視されていたと考えられる。そう考えるならば、クラヴァットにもそれらが少なからず影響していると考えることが出来よう。

また、1860年頃から1890年頃までの間、コートの衿が浅く、ボタンを上まで留めていたため、ネックウエアはほとんど見えなくなっている。

以上、1830年頃から1860年頃に至るまでのネクタイの簡略化についての背景である。世紀初頭は、クラヴァットはダンディにとって不可欠な装飾品であったが、世紀中期に入るとその重要性を失う。ターンダウン・カラーやラウンジ・ジャケットが現われたことや、コートの衿が高いということも一つの要因であろうが、わけても既製のネクタイが現われた1850年代初頭は、クラヴァットが簡略化へ向かった一つの大きな転期と考えられる。そして、既製のネクタイが用いられるようになったということは、言わば革命的な意味合いを持つと言っても過言ではないだろう。なぜなら、第一に、ブランメル時代のようにネクタイに時間的余裕を示すことにより、上流階級の持つ閑暇を表す必要性がなくなった、と考えられるからである。そして、

第二には、クラヴァットの大衆化がある。S・レヴィットも次のように述べている。

「充分な時間という特権を与えられた階級の人やそれを結ぶ召使は、徹底的にそれを軽蔑したが、反対に毎朝鏡の前に立ち、しかも何も準備をしなかった人々は、それに対し何の疑いも持たず支援した。(中略)なぜなら、それは途方もない不可能な限りの外観の効果を作り出し、それを見る全ての人達の賞賛を得ることを運命づけられているのである。」<sup>39)</sup>と。

それまで時間をかけてネクタイを結ぶことが不可能であった人々が、既製のネクタイを用いるようになった。それは、ネクタイをしている人とそれを見ている人との間の階級的な差別が縮まったとも考えられよう。

ところで、エレン・モアーズによると、1830年代のイギリスに反ダンディズム思潮が生まれ、それはフランスにも大きく影響しているという。更に、「1830年という年は、イギリスとフランスにおけるダンディズムの歴史の中の一つの転換期である。」<sup>40)</sup>とも主張している。1830年は、ポウ・ブランメルがフランスの北部カーンの英国領事として告示された年でもあり、彼は50歳という年齢に達し、かつての優雅なファッションの指導者としての姿はもはや見ることは出来なかった。そして、堀洋一もそれについて触れている<sup>41)</sup>。

こうして、男性ファッションの先導的存在であったブランメルが、1830年にはその役割を果たすだけの力を既に持ち合わせていなかった。さらにこの年は、ブランメルと同様、自他共にダンディを代表する一人であったジョージ四世が逝去した。

一方、前川祐一は次のように述べている。「1830年という年は、イギリスのダンディ趣味にとってはまさに凋落のきざし見え始めた不幸な年であった。自らも当代一流のダンディであり、いわばこの流行の最大のスポンサーでもあったジョージ四世を失ったのもこの年ならば、ダンディ趣味に反対し、批判の

論陣を張る最強の敵『フレイザーズ・マガジン』の出現を迎えたのもこの年だったからである。」<sup>42)</sup>

この『フレイザーズ・マガジン』という雑誌は、1830年の創刊以来、なかなか売れ行きが良く、寄稿者の中にはカーライルやサッカーも含まれていた。発行当初からダンディ趣味反対の立場をとり、中でもサッカーの1837年11月号に掲載されたThe Yellowplush Papers『馬丁粹語録』以来、彼のダンディ攻撃は相当のものであったとされている<sup>43)</sup>。

また、カーライルによる『衣装哲学』が、『フレイザーズ・マガジン』に発表されたのは、1833年から1834年にかけてで、彼はその中で、「洒落者とは着物を着る人、その商売、職務、生活が着物を着ることに存する人である。彼の靈魂、精神、財産及び身体は着物をうまくよく着るといふこの唯一の目的に英雄的に捧げられているのである。それで他の人々は生きるために着物を着るのに、彼は着物を着るために生活するのである。」<sup>44)</sup>と。

ダンディを皮肉まじりに表現している。そして、前川祐一も次のように述べている。

「1830年という時代的背景を考えてみても、カーライルの関心がダンディズム批判に向けられていたであろうことは十分に想像できる。即ち、この年は、イギリス・ダンディズムが凋落の運命を迎えた特筆すべき年であった<sup>45)</sup>。」と。

以上のように、イギリスにおけるダンディ趣味の衰退が、1830年頃を境に徐々に浸透していった。

## ま と め

クラヴァットへの関心が異常に高まった世紀初頭は、クラヴァットを入念に結び上げることが、ダンディにとって精神的な貴族性を創り上げる一つの手段であった。しかも、その方法は、以前に比べ知的であったと考えられる。その一つの現われが小冊子であり、クラヴァット

に隠された特殊な記号を読み取ることが出来るのは、小冊子を読んだ一部の者だけであったからである。即ち、そのような贅沢品を評価出来るのは、当時のエリートの少数であり、しかもお洒落の名人達であった。だからこそ、当時のクラヴァットが上流階級への栄達手段となり得たのである。北山晴一もこう述べている。「複雑な結び方が評価されたのは、それがお洒落のプロにしか理解出来ないものだったから、即ち上流階級同士の相互確認の暗号として役割を果たしていたからである」<sup>46)</sup>と。

これに対して、世紀半ばに至り、ネクタイは簡略化した。幅広い層に用いられるようになり、もはや一部の上流階級だけに許されたものではなく、一般化したと考えられるつまり、一部のダンディの象徴から大衆的なものに普遍し、一般市民の象徴となった。その背景には、ダンディズムの衰微があったものとみられる。

以上、19世紀クラヴァットにおけるダンディズムについて述べたが、私は、ここでロジェ・ケンプの言葉を引用して結びとしたい。

「ダンディズムが物腰あるいは視線の中にあるということ、まさにそれこそネクタイが示すものである。身づくろいに用いるあらゆる用品の中で、このうえなく満足させてくれるものであり、かつ無に最も近いもの。バチスト（薄手のリネン）の単なるきれっぱし、あまりに軽いのでブランメルが糊付けを考案したもの、人が手を動かさなければ形をなさないもの、これこそがネクタイなのだ。」<sup>47)</sup>

最後に、本稿の執筆に対しまして適切な御指導と御校閲を賜りました石山彰教授に感謝いたします。

#### 註

- 1) E・カラシュス著、山田登世子訳、『ダンディの神話』、海出版社、1980年、pp.118-119
- 2) Anonymous writer. Neckclothitania or Tietania, J. J. stockdail, Lond., 1818

- 3) H. Le Blanc. The Art of Tying the Cravate, E. Wilson, Lond., 1828
- 4) Osbaldeston, George. 1787-1866, 狩りの名士。オックスフォード大学在学中から狩猟を始め、その腕はイギリス中の狩猟家をしのいだと言われる。(The Dictionary of National Biography, Lond. 1967-68)
- 5) 柳沼恭子、『続西洋服飾関係欧文文献解題・目録』、文化女子大学図書館、1990年、pp. 34-35
- 6) フリギア王ゴルディオス (Gordius) が、戦車の前方に突き出たながえをくびきに結びつけた結び目。この結び目は、アジアの支配者となる人でなければ解けぬとされていたものを、アレキサンダー大王が剣を抜き切断したというもの。
- 7) Talma, François Joseph. 1763-1826, 俳優、ナポレオン庇護の下、写実的な演技で好評を博した。(ロベール仏和大辞典、小学館、1988年)
- 8) H. Le Blanc. *ibid.*, pp. III-IV
- 9) H. Le Blanc. *ibid.*, p. 16
- 10) De Marly, D.. Fashion for Men, Lond., 1985. p. 84
- 11) H. Le Blanc. *ibid.*, pp. 62-63
- 12) F・ペロー著、大矢タカヤス訳、『衣服のアルケオロジー』、文化出版局、1985年、第9章
- 13) ヴェブレン著、小原敬士訳、『有閑階級の理論』、岩波書店、1969年、p.165
- 14) B・ルドフスキー著、加藤秀俊・多田道太郎訳、『みっともない人体』、鹿島出版会、1969年、p. 284
- 15) B・ルドフスキー著、前掲書、p. 287
- 16) Laver, J.. Modesty in Dress, Lond., 1969, p. 119
- 17) H. Le Blanc. *ibid.*, p. 65
- 18) Binder, p.. Muff and Morals, Lond., 1953, p. 48
- 19) E・カラシュス著、前掲書、p.125
- 20) 北山晴一、『おしゃれと権力』、三省堂、1985年、p. 309
- 21) 福永武彦編集、『ボードレール全集Ⅳ』、矢内原伊作訳、人文書院、1981年、p. 322
- 22) E・カラシュス著、前掲書、p. 134
- 23) 生田耕作、『ダンディズム』、奢瀧都館、1987年、p. 8
- 24) Colle, D.. Collers Stocks Cravats, U.S.A., 1972, p. 72
- 25) F・ペロー著、前掲書、p. 170

- 26) ブーシェ著, 石山彰監訳, 『西洋服装史』, 文化出版局, 1985年, p. 303
- 27) Cunnington, C. W. & P.. Handbook of English Costume in the nineteenth century, Lond., 1970, p. 240
- 28) Cunnington, C. W. & P.. *ibid.*, p. 136
- 29) Lester. K. M. & Oerke. B. V.. Accessories of Dress, 1940, p. 219
- 30) 1844年から1855年。房飾りのついた幅広のネクタイ。ウエストコートの開きの部分に広げたアメリカ風スカーフタイから再興した。(Cunnington. A Dictionary of English Costume, Lond., 1965)
- 31) 1840, 1850年代。数インチのウールの一片か, シューストリングタイの幅のような小さな細いタイ。(Cunnington. A Dictionary of English Costume, Lond., 1965)
- 32) Levitt, S.. Victorians Unbuttoned, Lond., 1986, p. 144
- 33) De Marly, D.. *ibid.*, p. 101
- 34) Lester, K. M. & Oerke, B. V.. *ibid.*, p. 219
- 35) Waugh, N.. The Cut of Mens Clothes, Lond., 1964, p. 118
- 36) Colle, D.. *ibid.*, p. 16
- 37) 文化出版局編集部編, 『ネクタイ誌』, 1978年, p. 70
- 38) 丹野 郁, 『服飾の世界史』, 白水社, 1985年, p. 409
- 39) Levitt, S.. *ibid.*, p. 149
- 40) Moers, E.. The Dandy, N. Y., 1960, p. 124
- 41) 堀 洋一, 『ボウ・ブランメル』, (株)牧神社, 1979年, p. 288  
「カーンは依然として彼の世界であった。だが、

伊達者は、もはやかつてのボウ・ブランメルではなかった。(中略) 即ち、老いとは、優雅の実践者たらんすべてのダンディにとって一種の死刑宣告を意味するのだ。ブランメルといえども無論その例外ではなかった。肥満にこそ見舞われなかったが、その美しい背筋はもはや老年特有の兆候を示し始め、顔色は青白く、その表情からはかつての自信に満ちた不遜ささえほとんど消え失せていた。」

- 42) 前川祐一, 『マックス・ビアボウム』, 英潮社, 1979年, p. 69
- 43) 前川祐一, 前掲書, 第4章
- 44) トーマス・カーライル著, 石田憲次訳, 『衣装哲学』, 岩波書店, 1986年第2刷, p. 367
- 45) 前川祐一, 『ダンディズムの世界』, 晶文社, 1990年, p. 37
- 46) 北山晴一, 前掲書, p. 308
- 47) ロジェ・ケンプ著, 桜井哲夫訳, 『ダンディ』, 講談社, 1989年, p. 195

#### 図 版 出 典

- 図 1 Anonymous writer. Neckclothitania or Tietania, Lond., 1818
- 図 2 H. Le Blanc. The Art of Tying the Cravate, Lond. 1828
- 図 3 H. Le Blanc. *ibid.*
- 図 4 Rosenblum, R., 中山公夫訳, 『INGRES』, 美術出版社, 1970年
- 図 5 Rosenblum, R., 中山公夫訳, 前掲書
- 図 6 Waugh, N.. The Cut of Mens Clothes, Lond., 1964, Plate 22
- 図 7 Waugh, N.. *ibid.* Plate 23
- 図 8 Waugh, N.. *ibid.* Plate 24